

【金沢国税局長賞】

「税金がつなぐ、希望の未来」

富山県立滑川高等学校二年 吉松 美桜

二〇二四年一月一日に、石川県の能登半島を大きな地震が襲いました。多くの家が倒れ、道路が寸断されたたくさんの人々が生活の場を失いました。ニュースでその様子を見て、私は胸が締めつけられました。「もし自分が同じ立場だったら」と思うと、怖くなりました。

私は、富山県に住んでいて、能登半島と近く、地震のときには富山でも大きな揺れを感じました。家の食器が落ちたり、本棚が少し動いたりして、とても怖かったのを覚えています。「もし自分の家が壊れていたら」「もし学校に行けなくなったら」と考えると、他人事とは思えませんでした。

その後、自衛隊や消防の人たちがすぐに現地へ行き、救助や支援をしている様子をテレビで見ました。避難所に食べ物や水が届けられたり、仮設住宅が建てられたりしているのを見て、どうしてすぐにそんな支援ができるのだろうと疑問に思いました。調べてみるとそれは「税金」によって支えられていることが分かりました。

税金は、私たちが社会の中で生きていくために、みんなで出し合うお金です。地震のような、災害が起こったときには、人の命や生活を守るために使われます。能登半島のような大きな被害があった場所ですぐ支援ができるのも、税金があるからです。

また、税金は普段の生活の中でも使われています。学校や病院、警察や消防、公園や道路など身の回りの多くのことに税金が使われています。つまり、税金は私たちが安心して生きていくための「土台」となっています。

能登半島の人々が少しづつ日常を取り戻し、町が再建されていく姿を見て、私は「税金は誰かを助けるための、希望の種だ」と思いました。もし税金がなければ、災害から立ち直ることはできないかもしれません。しかし、私たち一人ひとりが少しづつ出し合ったお金が、誰かを助け、町を元気にし、未来への希望のつなぐ力になるのだと思います。

将来、私が大人になり、税金を納める立場になったとき、私は自分の税金が誰かの命を救ったり、困難を乗り越える力になることを信じて、胸を張ってその役割を果たしたいと思います。そして、私が「助ける側」として社会に貢献できるような人間になりたいと強く思いました。